

なる。だったら、何も不安に思わないで、自然に振舞う。その結果、彼らが受け入れてくれないのならそれはそれでしょうがない。」そう考え方を変えました。結果として、メンバーは皆快く迎えてくれ、私も気を使うことなく自然に振舞うことが出来ました。みんなから funny guy と言われながら、その場を十分堪能しました。アメリカ人の学生団体に参加することにより、ようやくここでの自分の存在価値を見出したような気がします。今でも活動は続けていて、そこで知り合ったメンバーとはこれからもいい関係を持ってそうです。消極的な気持ちに負け、参加するのを辞めてしまっていたらこのような経験は出来なかったと思います。

積極的にものごとに取り組めば取り組んだだけ、失敗するにせよ成功するにせよ、成長することは間違いないと思います。一年という限られた期間で、やりたいと思ったことはためらわず、失敗しようが何しようが、色々挑戦するべきだ、外国人なのだから失敗は許される。この経験がそう考えるきっかけとなりました。

### 3、マイノリティーであることによるアイデンティティーの表出

このように、私は外へ外へと自分を開く重要性を感じてきましたが、それと同時に「自分は日本人である。」という気持ちも強く表れています。アイデンティティーというものは心の根底にあるもので、簡単には取り除けないものなのだと考えさせられました。

今、私はアメリカという国に従うところは従いつつも、しかし、どこかで日本というものを忘れずに留めておきたい気持ちがあります。たとえば、こちらで水墨画風の絵や漢字がプリントされたTシャツを着ることに誇りを持っていますし、トヨタの車やソニーの電気製品を見ると誇らしくなります。日々の食事はほぼ毎日白米にふりかけをかけて食べています。自分とは何であるのかという問いに対する答えが、他国に身を置くことによって表れているのではないかと考えます。私にとって、日本人という意識、日本文化は海外生活での拠り所と表現できるのかもしれませんが。

似たようなことを、こちらに住む日本人からも見て取れると思います。彼らは長年日本から離れていることにより完全にアメリカナイズされるのではなく、かえって日本独自の古きよき文化を大切にしようという気持ちが生まれている、また、こちらで生まれ、日本での生活経験が皆無に等しい日本人・日系人でも、自分のルーツを日本に求めることが多い、私にはそう映ります。たとえば、CalPoly(私の大学の愛称)の日本語教授が組織する日本人Meetingでは、CalPolyにいる日本人の教授や学生を集めて色々日本文化に触れる活動を展開しようと非常に熱心に話し合ってい

ます。また、日本人でありながら、生まれてからずっとアメリカで育った私の友人は、兄弟で和太鼓を習っていて、そのことに誇りを持っていると話していました。

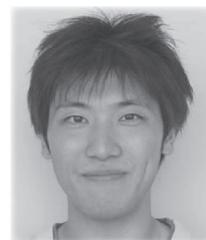
いかに科学技術が進行し、世界のグローバル化がなされても、人々の奥底にある民族意識というものは非常に根強いと思います。民族的な争いが未だ世界に存在している理由もわかるような気がします。

以上が、マイノリティーとして生活してきたことを通して、私が特に学んだり考えたりしたことです。このような体験は滅多に出来ることではないので、それをポジティブに捉え、今後も色々学んでいこうと思います。そうすることにより、私の留学での目標の一つである「視野を広げる」ということが可能になると考えます。

☆

midterm も終わり fall quarter も折り返し地点に来ました。未だカルチャーショックやトラブルは絶えません。毎週末、近くから大音量の音楽が流れてきて、非常にストレスが溜まります。数日前には、住んでいるアパートの一階と二階にあるトイレから同時に水や汚物が溢れてきて水浸しになるという大変なことも起きました。

留学中は感情の起伏が激しいように思えます。悲しいことがあるとことん落ち込んでしまう反面、嬉しいことは涙が出てくるくらい感動できます。ネガティブな気持ちになることに対するリスクヘッジをしながら、このような純粋な感覚を大切に、これからも一日一日を一生懸命生きていきたいと思っています。



服部 祐也

はっとり ゆうや

早稲田大学政治経済学部3年

California Polytechnic State University  
San Luis Obispo 校 留学中

#### 編集長から一言

服部君の2回目です。原文とおりです。

生真面目な性格を発揮して、落ち込んだり、涙を流したりと、充実した生活を送っているようです。

実は、服部君は、私が早稲田大学で持っているクラスの受講生の一人でした。クラスメート30名ほどが、全世界に散らばって、来年夏までの短期留学で学んでいます。